

討論

【林慶勲】 一ノ瀬先生、ありがとうございました。放射能汚染の問題について、科学的知見もふまえ、たいへん力の入った御論を発表していただきました。

質問を受け付けたいと思います。質問がある方は、挙手をしてください。

【福岡聡（東京大学COE特任研究員）】 東京大学の研究員をしております福岡と申します。

さきほどの竹内先生のご発表は、震災と原発によって危機に瀕している日本の現状を変えていくためには、たんなる理性的なものとのみではなく、理性を超えた智慧や感覚といったものが必要だというご主旨でした。一ノ瀬先生はおそらく理性主義のお立場だと思うのですが、そのお立場から、日本の現状に対してどのような考え方や態度が必要であると考えていらっしゃるのかをお聴きしたいと思います。

【一ノ瀬】 私の考えでは、この問題にたいする即効的な解決策はありません。したがって、現在の状況を受け入れて、そのなかでよりましな生き方はいかに可能かを考えていくしかないと考えています。

しかし、長期的には二つ可能性があると思います。ひとつは原子力発電所を廃止するという方向です。いま、多くの日本人が原発廃止の運動にも参加しています。これは少し時間がかかりますが、他の国の例を考えると不可能ではありません。何十年かかかるとは思いますが、電力やエネルギーを得るための他の道を探するという方法です。もうひとつは、原発は維持しつつ、原発事故に備えてさらに技術を革新するという道です。

どちらの道が本当にいいのか、私には現段階ではわかりません。結局は政治が決めていくことですが、理論的にはその二つの道筋がありうると思います。二番目の道は、現在の多くの日本人の心理を考えれば採りにくい道だと思いますが、理性的に考えれば、人類は二番目の可能性も探るのではないかと思っています。ただ、現在の私の個人的な感覚では、原発廃止ができるのなら、そちらの方がよいかなと感じています。

【林慶勲】 他にご質問はあるでしょうか。

【エリック・シツケタンツ（東京大学COE特任研究員）】 先生は、今回の出来事は日本が未だかつて経験したことがない事件だとおっしゃいましたけれども、ご発表の中でも少し触れられていたように、世界を見わたせば、過去にはチェルノブイリの事故がありました。そこから、日本が今後取るべき方針や方向性について、何か具体的なヒントを得られるでしょうか。それともチェルノブイリの事故と今回の事故とは違いが大きい、具体的なヒントにはならないのでしょうか。お考えをお聴かせ願えればと思います。

【二ノ瀬】 おっしゃる通り、チェルノブイリの事故はおおいに参考になります。福島事故と相違もありますが、非常に似ているところもあるからです。

ただ、チェルノブイリの事故に関する詳細は、政治的な事情も絡んだりして、必ずしもあきらかではありませんし、そもそもあの事故からまだ二十五年しか経っておりません。二十五年ではまだ完全にはわからない。今後チェルノブイリで何が発生するのかもわかっていないわけです。そういう意味で、今回の福島事故とチェルノブイリの事故は、二十五年の差はありますが、長い目で見ればほぼ同時進行と言ってもよい。

らしいレベルの話です。両方の事故に関して、五十年、百年と考えた場合の、発がん、遺伝的な影響、生態系への影響などについて、未知数の部分があまりに多いという難しさがあります。

とはいえ、チェルノブイリの事故の情報は、むしろ第一級の資料になると思います。

原子力発電所は、いまや全世界にあります。したがって、チェルノブイリや福島のような事故の可能性は、全世界であります。昨日うかがったところ、台湾にも四基の原発があるということでした。

私たち日本人、特に東日本に住んでいる人たちは、もうすでに事実として何らかの線量の被曝をしています。外国に避難するという場合は別にして、日本に住んでいる以上、しばらくは放射性物質からは逃げられませんので、その事態を受け入れて、将来世代の人類のために、サンプルとして貴重な資料になりたいと、そのくらいの気持ちで生きていいのではないかと私は思っています。もちろん、事故の人為面に関する責任追及は絶対に行っていかなければなりませんし、被曝を可能な限り避けるという方策も全力で実行していかねばならないことは、言うまでもありません。そして同時に、起こった事実をもうキャンセルはできないということ、そのことを踏まえて、その中での今後の生き方を、できればポジティブかつ前向きな仕方、模索していければと願っているのです。

【林慶勲】 竹内先生、一ノ瀬先生、どうもありがとうございます。両先生のご発表はどちらも、三・一一の地震に深く関係するものでした。

私は最近、七十歳を超えた日本のご老人を取材する機会がありました。東京に住んでいる方なのですが、彼は心理的にそれほど不安定になってはいませんでした。一方、日本では毎日のように放射線、線量の問題、数値などが公表されていて、それほど高い数値にはなっていないところも多いにもかかわらず、若い世代の人た

ちの中には、それらの数値に非常に気にしている人が多いようです。放射線の問題は、年齢によっても捉え方が違うのではないかと考えています。このことは、またみなさんにおいおい考えていただけたらと思います。

それでは時間もまいりましたので、お二人のご発表者に感謝の意を申し述べたいと思います。ありがとうございます。（拍手）